

8 山王廃寺の創建 —上植木廃寺との対比から見えるもの—

出 浦 崇

はじめに

山王廃寺は7世紀第III四半期に創建されたと考えられる上野国では最古に位置づけられる古代寺院である。平成18年度から山王廃寺の実態を解明すべく確認調査が開始され、これまでに伽藍配置や出土瓦の状況など新たな知見も得られ、その実態が徐々に明らかになってきている。上野国において7世紀後半段階で山王廃寺以外にも佐位郡上植木廃寺、新田郡寺井廃寺など、西毛と東毛の中心となる郡にそれぞれ寺院が建立されている。ここでは出土瓦を中心に調査の進んでいる上植木廃寺との比較を行い、山王廃寺の創建等について若干の考察を行いたい。

(1) 山王廃寺と上植木廃寺

山王廃寺の創建は7世紀第III四半期と想定されており、前期評段階に創建された上野唯一の寺院である。山王廃寺の主要伽藍下層には主軸方位の異なる掘立柱建物が複数確認されており、前期評衙の可能性も指摘されている。また周辺に群馬群衙が存在することも充分に考えられることや寺院の規模、出土瓦やその展開などを考慮すれば山王廃寺は群衙周辺の可能性が高い。終末期古墳の状況について総社古墳群との関連がすでに指摘されており、その変遷の中で山王廃寺も位置づけられている。

上植木廃寺は伊勢崎市上植木本町から本関町にかけて所在する。これまで多くの発掘調査が実施され、その伽藍配置や出土瓦の状況など多くのことが判明してきている。金堂を中心にその南西に塔、北に講堂、中門から発する回廊は講堂に取り付く。

また食堂と考えられる掘立柱建物や道路状遺構、創建期瓦窯である上植木廃寺瓦窯なども検出されている。南1kmの地点には佐位郡衙正倉である三軒屋遺跡が確認されており、上植木廃寺は佐位郡の郡衙周辺寺院と考えられる。

終末期古墳の分布をみると北西3kmの地点に所在する祝堂古墳が第一にあげられる。祝堂古墳は30mほどの円墳であり、二重の周溝を構える。主体部の大半は破壊されていたが、角閃石安山岩を用いた横穴式石室である。注目すべきは石室下層に掘り込み地業が施されていたことであり、その技法の共通性から上植木廃寺を創建した氏族との関わりが指摘されている。

佐位郡では寺院堂塔、正倉礎石建物、正倉東で確認されている大道西遺跡でも版築状盛土を伴う道路跡が検出されており、掘り込み地業や版築といった土木技法の盛行が7世紀から8世紀にかけてのひとつの特徴になっている。

(2) 出土瓦について

次に山王廃寺、上植木廃寺の出土瓦の特徴について比較してみたい。ここでは国分寺創建以前、以後に分け両寺の出土瓦の状況を概観することとする。

①国分寺創建以前の様相

山王廃寺の創建瓦は素弁八葉蓮華紋軒丸瓦であるが生産地は不明である。その後、7世紀第IV四半期には複弁八葉及び七葉蓮華紋軒丸瓦が主流となり伽藍が整備されていく。これらは碓氷郡秋間古窯跡群の八重巻瓦窯で生産されている。この複弁七葉蓮華紋軒丸瓦は山王廃寺を祖型とし8世紀前段階において西毛地域に広く分布している。さらに東毛地域の寺井廃寺などにも分布しており、西毛のみならず山王廃寺の影響下のもと、広い地域で

寺院が新造及び修造されている。またこの時期の瓦は陸奥への影響も指摘されており、主に福島県浜通り地域に同系の瓦が分布することがわかっている。

上植木廃寺の創建瓦は素弁蓮華紋軒丸瓦（A01a）、それを単弁に掘り直したもの（A01a）と簾状重弧紋軒平瓦（N01）のセットであり、上植木廃寺瓦窯から供給されている。これらの瓦は尾張元興寺の影響で成立したものと考えられている。その後、窯場を勢多郡雷電山瓦窯に移し、その後継範種（A02～05・N03～N06）の生産を行っている。その後、国分寺創建直前に東国での初見となる一本造り技法が軒丸瓦（C・E・D種）に採用される。単弁系のA種や一本造りの軒丸瓦は寺井廃寺や入谷遺跡、吾妻郡の寺井廃寺、さらには北武藏の造寺活動に影響を与えていた。さらに山王廃寺同様に当該期の瓦は陸奥への影響が想定されており、主に仙台平野や大崎平野の官衙、官衙関連寺院に分布している。

このように国分寺創建以前においては山王・上植木廃寺が上野国内や北武藏の造寺活動の中心となっている。さらに東北への影響という面においても共通した特徴をもつ。しかしながら両寺院の間には紋様及び製作技術等の交流はまったく認められない。

②国分寺創建以降の様相

次に国分寺創建以降の様相について見てゆく。国分寺創建後、国内の寺院は国分寺系瓦の比率が増え、国分寺瓦編年のII—2期以降、顕著になっていく。山王廃寺ではII—2期ではB201の出土が認められるが、量的には非常に少ない。これは西毛全体の傾向にもなっている。一方、上植木廃寺を含む東毛諸地域ではII—2・3期に該当する紋様瓦が数多く出土しており（II—2期は新田郡のみ）、様相が異なるようである。しかし山王廃寺、上植木廃寺とともにこの時期上野国分寺系の瓦を採用しており、8世紀後半段階には「放光寺」の文字瓦をもつ山王廃寺はもとより、上植木廃寺も定額寺としての寺格を獲ていた可能性が高い。

9世紀以降、国分寺瓦編年III期の段階になると山王廃寺でも国分寺系瓦の比率が高くなる。そして国分寺創建以前と同様に山王廃寺が西毛地域の造寺活動の中心となっていることが、出土瓦の検討から明らかになっている。

この時期、上植木廃寺でも多くの国分寺系瓦の出土が認められるが、他の東毛諸地域の寺院からはほとんど確認されないという傾向にあり、III期の瓦を積極的に取り入れている西毛地域とは異なるようである。

このように両廃寺ともに国分寺創建後は積極的に国分寺系瓦を採用し、9世紀にはその国分寺瓦を使用し補修や堂塔の建て替えなどを繰り返し長期間、存続していくことが判明している。これは文献史料にみられる定額寺の補修等の記事にも合致する。しかし、国分寺創建後の両寺院の様相を比較すると、山王廃寺は西毛地域の寺院に多大なる影響を与え、その中に位置しつづけるのに対し、上植木廃寺は郡衙周辺寺院および郡内の定額寺としての性格のみが強調されている感が否がめない。

(3) まとめにかえて

山王廃寺と上植木廃寺は西毛、東毛を代表する古代寺院であるが、終末期古墳の状況や出土瓦等、相容れない部分が多い。なかでも瓦は紋様及びその系譜、製作技法、その派生に至るまで一線を画している。上野国は古墳時代より西毛地域と東毛地域との差異というものが様々な研究者によって言及してきた。このように上野国の古代社会を明らかにするためには、両寺院の存在意義を明確に把握する必要があり、古墳時代から律令制への移行との関わりの中で考えることも重要である。

今回、筆者は前橋市教育委員会のご厚意で山王廃寺調査部会幹事に名を連ねさせていただき、調査等に関与させていただいた。今後はこの経験を活かし、両市教育委員会で協力し、山王廃寺、上植木廃寺の全容解明に全力を注いでいきたい。

※紙面の都合上、参考文献等は割愛した。

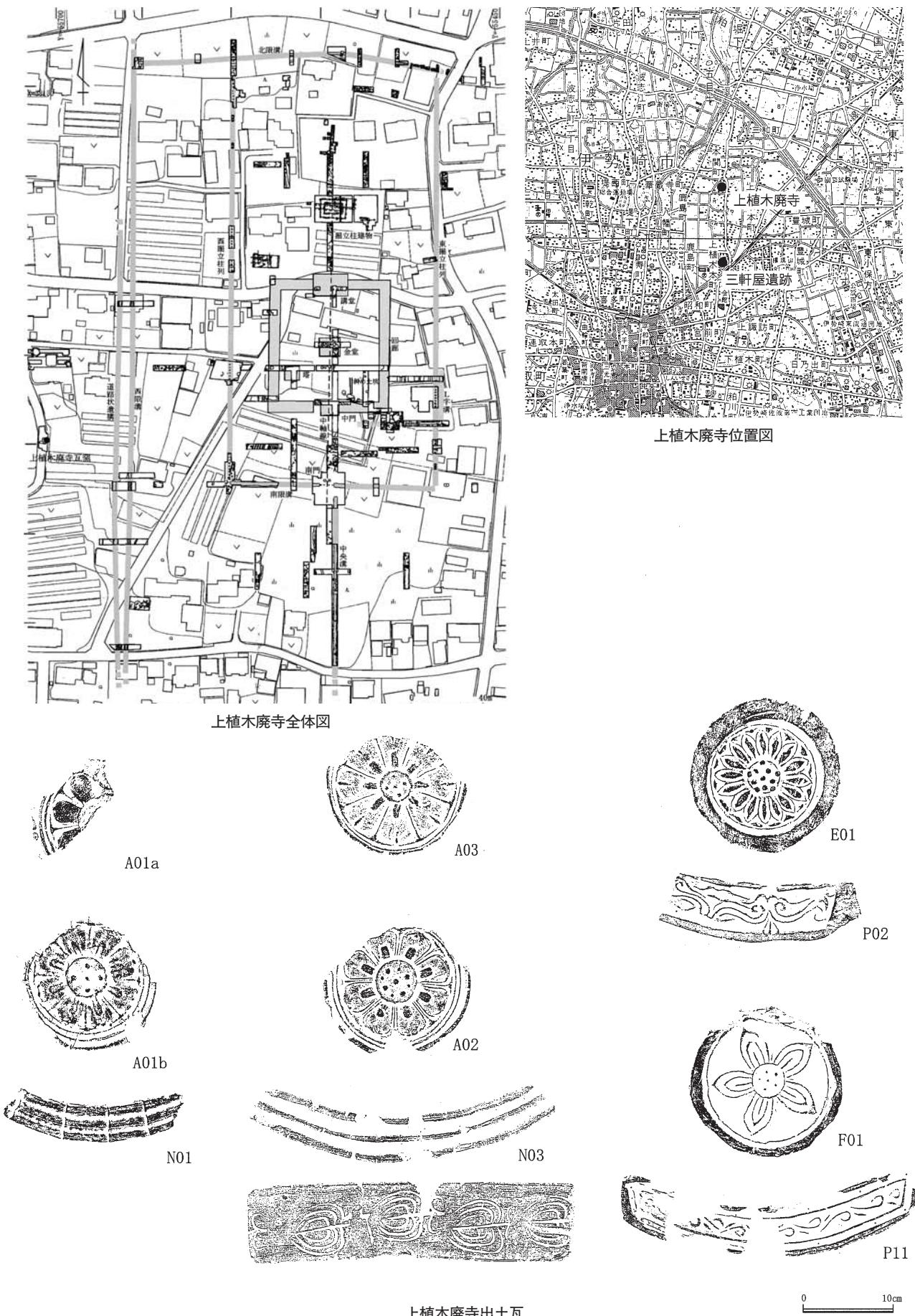


Fig.64 上植木廢寺関係資料